

試験で使える小技

～ 時には広く大雑把に、時には狭く厳密に！ ～

物事には、種類や性質にある程度の幅(範囲)があります。日常生活上でもそうですが、試験学習時や試験実施時にも、この幅を変えて捉えてみることによって、見え方が変わることがあります。

今回は、厳選良問の「知的機能の加齢変化」でも若干触れたので、この幅の部分について、厳選良問の「知的機能の加齢変化」でも取り上げた記憶、知能、感情、知覚、感覚の5つを例に説明します。

この5つは、それぞれ別物のように思えます。試験でも「記憶について～」「知覚について～」と別々に取り扱われていることが多いです。個々にその幅をみてみると、記憶の場合は、範囲を狭くすると、長期記憶と短期記憶に大別され、さらに注目エピソード記憶や作業記憶などの種類があるとなります。逆に広く捉えると「脳で処理しているもの」といえます。一方、知能の範囲を狭くすると、流動性知能と結晶性知能に分けられますが、大きく捉えると「脳で処理しているもの」といえます。感覚も同様で、厳密にみると、嗅覚、視覚、聴覚などがあり、聴覚をもっと細かくみれば、外耳といった耳の構造と機能にいきつきます。逆に広く大雑把に捉えると、やはり「脳で処理しているもの」といえます。「こんにちは」という相手の言葉を聞き取るのは、「耳」ですが、最終的に「こんにちは」という言葉を自分自身に理解させるのは「脳」ですよね。辛い料理を食べて「辛い！」と感じ取るのは「舌」ですが、それを「辛い」と認識するのは、やはり「脳」です。

つまり、記憶、知能、感情、知覚、感覚の5つは、厳密には別物ですが、大雑把に捉えると、全て「脳で処理するもの」というグループに属するものとして捉えることができます。人にぶつかって、「痛い」と感じた感覚、「痛かった」という記憶、「痛くて、悲しい」という感情のように、1つの出来事で共通する複数の事柄が同時発生しますので、同じグループになったものは、基本的に相互に共通するものがあるはずなのです。

ですから、試験問題を解く際は、捉える範囲、捉え方を変えれば、見え方も変わり、分からない部分分かる場合あるということを常に頭の隅に置きながら取り組んでください。とくに正誤判断に悩んだ時は、範囲などを変えながら推察していくと正しい判断を下せることもあります。

これは、学習時も同様で、多くのテキストでは、記憶、知能、感情など、見出しを分けて掲載していますが、「脳で処理するもの」という共通項を認識していれば、理解度も変わってくるかと思えます。

福祉試験対策工房&ぼぼ屋は、FacebookやInstagramも開設しています。

 @fukusitaisaku_boboya

 fukusitaisaku_boboya

★「いいね」「フォロー」大歓迎です！是非ご覧になってください★

